

黒毛和種肥育牛における創傷性肝膿瘍の1症例

西播基幹家畜診療所

○柳澤義人 宇崎敬与 菅 保礼 玉井 登 小田修一 森本啓介

肥育牛における肝膿瘍は肥育期の濃厚飼料多給に起因するルーメンアシドーシスにより引き起こされることが多い。今回、肝炎にて加療したが回復しない症例に対し病理解剖検査を実施したところ、第四胃壁を貫通した金属性異物の刺入が原因と考えられた創傷性肝膿瘍であった。

材料および方法

農場の概要：約 440 頭飼養の県内黒毛和種牛肥育農場。

症例：2012 年 9 月 27 日生まれの黒毛和種去勢牛で、2013 年 7 月 18 日に導入。

臨床経過：2014 年 5 月 23 日に食欲不振の主訴にて求診。初診時、削瘦著明、被毛粗剛、体温 39.1℃、活力低下、食欲不振、肺音粗励、黄色水様便を呈し、血液検査にて AST の顕著な増加 (1412U/L) と T-Bil の増加 (1.5mg/dL) がみられた。補液剤、抗生物質、デキサメタゾンおよび強肝剤にて加療したが、体温および食欲不定、下痢便と硬固便を繰り返した。6 月 13 日より左側下腹部にて有響性金属音を聴取し、背弯姿勢を示した。食欲、活力ともに回復せず、徐々に削瘦進行するため、7 月 3 日に姫路家畜保健衛生所にて病理解剖検査を実施した。

結 果

血液検査：解剖時、WBC $221 \times 10^2 / \mu\text{L}$, RBC $1088 \times 10^4 / \mu\text{L}$, TP 7.4g/dL, A/G 0.32 (A1b 1.8g/dL, G1b 5.6g/dL), T-Chol 19mg/dL, AST 498U/L, GGT 32U/L, T-Bil 0.8mg/dL であった。

電気泳動： α_2 -G1b, γ -G1b の顕著な増加および β - γ ブリッジ形成。

病理解剖検査：第四胃壁に約 6cm の金属性異物が貫通し、粘膜面に多数の穿孔痕を認めた。肝臓は腹膜や横隔膜と著しく癒着、右葉は線維素の塊で覆われ、漿膜面に穿孔痕を認めた。白色膿瘍を多数形成し、右葉実質は複数の直径 3～5cm の巨大膿瘍により破壊されていた。肺は右中葉、後葉に白色膿瘍を多数形成、胸膜や横隔膜と癒着していた。

細菌検査：肝臓、肺の膿瘍から *Arcanobacterium pyogenes* を分離。

病理組織検査：肝臓は重度線維化、膿瘍内に細胞退廃物充満、周囲にマクロファージがみられた。肺膿瘍内は細菌塊、細胞退廃物を認め、周囲に好中球、マクロファージがみられた。

考 察

第四胃壁を金属性異物が貫通し、肝臓漿膜面に穿孔痕を認めたことから、金属性異物の刺入により細菌感染を起こし、肝膿瘍が形成されたため、体温および食欲の不定、不整便等の症状がみられたと考えられた。肺病変は分離された細菌が肝臓と同一であることから、血行性あるいは肝臓と癒着した横隔膜から波及した可能性が示唆された。今回の症例では、金属性異物が病態の形成、進行に関与した可能性が高いため、肥育牛へのパーネット投与を再考する必要があると思われる。